

英文学夜ばなし

中野好夫



新潮選書

わたしの英文学修業などは、完全にホーム・メイドである。これでは実証的研究などお話しにならぬし、実証的研究を踏んまえない鑑賞批評など、危なかしいかぎりである。わたしは、例のスイフトなどについても一応知ったかぶりのようなことを書いているものの、正直、すべて向うの研究の受売りである。本書もことごとしい英文学者などから完全に脱落、失格したものの気楽な「夜ばなし」としてお聴きいただきたい。 著者

中野好夫

新潮選書



えいぶんがくよ
英文学夜ばなし〈新潮選書〉



© Yoshio Nakano Printed in Japan, 1971

昭和四十六年十二月十日 印刷
昭和四十六年十二月十五日 発行

定価 四五〇円

著者 中野好夫
発行者 佐藤亮一

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
電話東京(〇三)二六〇一―一六二
振替東京 八〇八番

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

英文学夜はなし
目次

はじめに 7

読書遍歴から 15

浪漫主義と古典主義 53

影響と暗合 83

翻訳雑話 103

読む、書く、しゃべるといふこと

想像力のトリック——空想奇談について 155

異文化接触と国語の問題 173

イギリス文学とアナーキズム 193

Pot-pourri 213

文学と老人 233

あとがき 253

英文学夜ばなし

はじめに

例によって「学鏡」誌編集の本庄さんにおだてられ、「英文学夜はなし」などというものを連載することになった。どうせことごとしい英文学者などというものからは、完全に脱落、失格した小生のこと、いずれせいぜいが「夜はなし」くらいに程度にしかならぬのは致し方ないとして、ただおかげでいくらか気楽なことだけは事実である。

それにしても、学者といい、教授という職業（なりわい）ほどつらいものはない。考えてもみるがよい、あの十何世紀かにわたるイギリス文学の作品というのを、どうせ直接読みつくせないことは、子供にだってわかつている。もし本当に読みつくしていたら化物であろう。おまけに、これは年々歳々、新人とやら、新作品とやら中すものが、下痢便のように送り出されてくる。はたしてそれらの何パーセントが将来に向って評価をもちつづけるか、きわめて怪しいものだが、それが学者となり、教授となると、一応は知ったような顔もせねばならぬ。若い学生諸君などというのは、わたし自身もかつては覚えがあるので、あまり責められた義理でないが、とかく気

負つての新しいもの好きである。若い間なら知らず、相当の年齢にもなれば、とうてい太刀打ちなどできるものでない。まして近ごろのわたしのようなオイボレになると、とてももうやりきれないを通り越して、バカバカしくさえなる。いや、もう学者とは、まことに間尺にあわぬ職業である。そこへ行くと、失格と悟つてしまえば、気は楽だ。近ごろでは、知らぬことは知らぬ、読まぬものは読まぬと、まことに暗々と答えることができる。第一、精神衛生によろしいのである。読みもしない作品を、読んだかのごとく、読まないかのごとく、そこらの参考文献を拾い読みして、アイマイモコたる英文学史などというものを講じていたころのことを考えると、腋わきの下が冷たくなって夢のようだ。

おまけに、いま一ついけないのは、さて一応は研究をしているはずの作家、作品を論じるにしても、鑑賞批判はとにかくとして、ひとたび考証的操作にはいっていくと、情けないが、本場研究者の糟粕をなめているよりほかには、まったくのお手あげなのだ。小さな事実の考証などというが、ときにはこれが作家、作品の鑑賞そのものを大きく左右することがある。それが困るのだ。

つい両三年前の話だが、つい迂濶にもジョゼフ・コンラッドなる作家の入門書を身のほど知らずに引き受けて、伝記部分を分担することになった。ところが、このポーランド生れというイギリス作家の青年時代を扱うことになって、つくづく情けない思いをした。コンラッドというこの作家については、近年原資料による研究で、ずいぶん隠されていた事実に新しい照明が当てられた。たとえば失恋による自殺未遂事件と呼ばれるものなどもその一つだが、なにしろ

無名の若い船員時代のことなので、当然資料は生国ポーランド関係のものが多く、かつ重要である。そうなると、われわれにはもうちょっと手の下し方がない。わたしなども、一応今日もつとも信頼性の高いある某アメリカ人研究者の考証結果に、多少は疑問をのこしながらも、お世話になるより仕方がなかったが、考えてみれば情けない話である。

またわたしは、例の『ガリヴァー旅行記』のスイフトなどについても、一応知ったかぶりのようなことは書いているものの、正直に申せば、すべて向うの研究者の受売りである。わたし自身の探究による成果などなの一つとしてない。上に述べたコンラッド小伝を書いたときにも、「いずれ遠い東京の書齋で、必ずしも専門のコンラッド研究者ならぬ筆者が、まことに無精な隔靴搔痒かつかさうようのような感で書くのだから、主として抛りどころは、ベインズの労作にもとめたと、とてもこれ以上のことを、いま根本資料に当たってたしかめることは、力も暇もないからだ」と、情けないが、正直な告白をするよりほかなかった。

もつとも、近ごろアメリカの日本文学研究者のように、ほとんど毎年、いや、ときには年にいくどとなく来日して、何カ月も滞在するというようなことにでもなれば、話は別だが、わたしの英文学修業などは、ほとんど完全にホーム・メイドである。これでは実証的研究などお話にならぬし、実証的研究を踏んまえない鑑賞批評など、危なかしいかぎりである。もちろん、わたし程度の才能でも、かりに若くて五年、十年といった歳月を、イギリスなりアメリカなり、本国での研究機会を恵まれることになれば、そう本場の学者にひけをとらない程度の業績をあげる自信はないでもない。それもできぬというほど自己卑下をする気はないからである。だが、

もはや老衰のわたしなどは別として、現在の若い学徒諸君にしても、そうした機会をあたえられる可能性は、とうてい望み薄であろう。国民総生産世界第三位とやらの経済大国になったという話だが、そんな余沢に外国文学者があずかれる見込みはまずないと思わねばならぬ。してみると、金持のバカ息子にだけできることであるかもしれないが、だからと三尺梯子が急に六尺梯子に伸びるはずもない。齡をとるにしたがつて、外国文学の研究に意欲が失われるというのも、やむをえないのではなからうか。

現にその証拠に、日本の作家、文学を究めるといふことになる、話はずいぶんとちがつてくる。私事にわたって恐縮だが、わたしはこの一、二年、徳富蘆花という人間に興味をもち、いずれは本にまとめた気持で、原資料調べにとりかかってみた。ところが、それではじめてわかったのだが、これまで蘆花関係については、相当すぐれた研究書、研究論文も出ているはずであった。ところが、さて蘆花因縁の現地に足を運んで調べ出してみると、まだまだ未踏査の資料もあれば、これまでのいろいろ通説にしても、ずいぶん修正されねばならぬ事実が出てくるのである。それらはいずれ別に活字にするつもりだが、これまでわかった事実だけでも、三つや四つはたちどころにある。必ずしもすべてが重要な伝記事実ばかりとはいえぬが、やはり新しい事実や文献が発掘できるといふのは、楽しいものである。少なくとも東京などで外国文学をやっているかぎりでは、味わいえない喜びだといえる。

なんとも言訳ばかりの前口上になってしまったが、ありようはつまりそんなものなのである。したがって、以下「英文学夜ばなし」などと称しても、まったくのお粗末品であることはい

までもない。『シェイクスピアの面白さ』以下の、おそらく学者の風上にもおけぬような代物になるだろうことだけは、筆者自身太鼓判を押しておく。ご退屈さまということにでもなれば、いつでも止めるつもりだが。

もつとも、そうは書いても、わたしといえども、ときに少壮英文学徒諸君の学界論文を読まぬわけではない。そして、その感想を一言にしているならば、まことに精緻で、こまかく問題を掘り下げているところなど、わたしなど、よくぞ早く自己失格を表明したものだ、思わず頸筋を撫でたくなるほどである。

考えてみると、わたしなど二十代、三十代のはじめにやった英文学勉強など、お寒いかぎりであった。大づかみで、腰だめで、まことに、へへ、呑気だね、とすら言いたくなる。もつとも、本場の英文学研究そのものが、三十年前、四十年前とは、同日の談でない進歩ぶりである。わたし自身は大学を出た年に、ベン・ジョンソンというシェイクスピアと同時代人劇作家の喜劇論などと申す拙論を、「英文学研究」という学界誌に発表させてもらったことがあるが、いまから考えてみれば、「天使も踏みこまぬ場所に、愚者なればこそ足を踏み入れた」感が深い。全集といつても、いまあるハーフォッド・シンプソン編纂の権威版など、影も形もなかった。カニンガム編という、十九世紀出版のごくおざなりの全集があっただけである。流布本といつても、テンプル・クラシック本というのと、エヴリマン・ライブラリ版の、どちらもあまり学問的ではないのが、輸入されていたのがせいぜいだった。伝記、評論類も数えるほどしかなかった。それをいいことに喜劇論などを書いたのだから、臆面のなさもいいところだった。

シェイクスピアにしても、だいたいますそうであつた。さすがにこの方は、もつと学問的な全集もあり、伝記、評論もいまもつて歴史の意味を失わないものが相当に出ていた。だが、その後に出た汗牛充棟ともいふべき新研究書にくらべれば、数においてお話にならぬ。おそらくいまのシェイクスピア学ならば、中学教師の小遣錢で勉強していたわたしなど、とつくに絶望して断念していたに相違ない。

そのかわりに、瘦我慢の言訳をいえば、参考文献が比較的少ないから、とにかくガムシヤラに原作を読むよりほかなかつた。そして、ごく大づかみの作家観、作品観を勝手につくり上げていたというわけである。したがつて、学問的水準からいえば、まことにお恥ずかしいものであつたに相違ない。だが、これも一つ瘦我慢ついでにいえば、学問的業績としてはとにかく、おのれの心を養う点では、立派にゆたかな魂の肥料になつてくれたように思うのである。

それで思うのは、わたしなどより一時代も二時代も前の、いわゆる「文学界」運動をもり上げた北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、平田秃木などいう（あるいはさらに蒲原有明、国木田独歩等々といった名前を加えてもよい）若い人たちの英詩からの吸収ぶりである。当時はたしかキャツセル・ライブラリーとかいった、わたしなどの学生時代にはすでに時代おくれになつていた廉価本が、やつと入手できたころらしい。やつと手にしたそうしたイギリス浪漫詩人集の一冊を、彼等が次々とまわし読みして、ワーズワス、バイロン、キーツなどに親しんだという逸話を、現に晩年の藤村から聞いたことがある。もちろん、学問的な読み方など、できもしなければ、するつもりもなかつたであらう。だが、イギリス、あるいは泰西浪漫詩の精神そのも

のを端的につかんだということでは、わたしたち夢にも笑うことはできないはず。だからこそ、透谷にしても、藤村にしても、有明にしても、いや、独歩にしても、あの清新な新風を明治文学の一角に吹きこむことができたのであろう。

そこでまた現代の若い英文学徒諸君の研究論にもどるわけだが、最後に一つだけ、オイボレの不满を述べさせてもらいたい。上にも書いたように、ときに瞠目するほど気鋭な学徒諸君の論文には、ときにわたしたち老骨など愧死きししたくなるほど精緻な問題探究がある。よくもこう小さな問題を、こうも丹念に詮索したものかなと、感歎これを久しゅうするような論文にさえお目にかかる。ところが、そんなとき、しばらくたつて妙に索然たる気持になるのは、こうまでこんな小さな問題を掘り下げていて、いったい日本文学に——とまで大きなことはいわぬにしても、せめては研究者自身にとって、果してなんの魂の糧になつているのだろうかという疑問である。しかもその詮索というのが、結局はかつてのわたしたしの歎きと同じように、決して直接根本資料に当つての考証検討ではない。要するに、やむをえぬといえればそれまでだが、本場の研究の要領よい取捨、そして総合にすぎないのではないか。問題の片隅をほじくる精緻も結構、大いに興つていいのであるが、たまには多少の腰だめでもいいから、体当たりとでもいうか、研究者自身の魂の要求との間に、火花を散らすような英文学論もあっていいのではないか。愚痴になるのは老人の常として、なんともお日こほしをねがうよりほかないが、とにかくその辺に大きな不満がのこる。

あまり冴えないまくらだが、以上、とにかく前置きまでを。

